

学位論文の要旨

音楽研究科博士課程音楽専攻

器楽領域（ピアノ）

池田 董

本論文は、ピアニストとしてのイグナーツ・モシェレス（1794–1870）に焦点を当て、彼の遺した書簡、演奏活動、演奏会のプログラム、モシェレス自ら記した楽譜の言葉などの考察から、交友関係、演奏活動とピアニストとしての美学の一端を明らかにすることを目的としている。

本論は4章からなる。

第1章では、彼の妻であるシャルロッテ・モシェレスの書いたモシェレス伝に基づき彼の生涯を追い、これまで明らかになっていたモシェレスの軌跡を辿る。さらに、作曲家としてのモシェレスにも焦点を当て、作曲家モシェレスの創作活動を概観する。本章においては、モシェレスが、ヴィルトゥオーゾとして聴衆の対象や特定の地域を意識して創作したと考えられる作品についても触れるとともに、彼の演奏会レパートリーになっていたと思われる作品についても言及している。

第2章では、モシェレスの人物像と交友関係を描き出す。モシェレスの遺した書簡や日記の内容をもとにモシェレスの人物像を多角的に検証し、モシェレスの存在が他の音楽家にとってどのようなものであったか、その一端を明らかにする。その上で、他の音楽家の存在に対するモシェレスの見方にも着目し、モシェレスが、次世代の音楽の潮流である「新たな楽派」の創作する音楽とその演奏スタイルをどのように捉えていたかも併せて考察している。モシェレスは、幼少期より触れて憧れを抱いていた古典的な音楽のみに固執するわけではなく、新たな音楽への強い関心と、その作品を理解し自身の作品にも取り入れていこうとする柔軟性や意欲的な姿勢も持ち合わせていたことが明らかになった。

第3章では、モシェレスのピアニストとしての活動内容から、彼の目指したピアニスト像について考察している。まず、モシェレスが出演した演奏会の開催地とその年代を分析してピアニストとしての活動実態を把握し、さらに、演奏会で使用した楽器の記録や本人の証言から、モシェレスが追求した音質を明らかにしている。また、当時の批評をもとにモシェレスの音楽性や演奏スタイルの変遷について考察している。基本的には彼の演奏で最も評価されていたのはヴィルトゥオーゾ性であった。一方で、当時の批評が示唆しているのは、モシェレスが、華美で技巧性を誇示した演奏スタイルから、作品の持つ音楽性を重視する姿勢へと変化していく可能性である。本章では、そうした変化を象徴するのが、自ら企画しピアニストとして出演した「クラシックピアノフルテ

音楽」の演奏会シリーズであると位置付けている。本シリーズは、これまでの雑多な演奏会とは一線を画し、「ピアノのための作品」と「クラシック作品」という大きな2つのテーマに基づいてプログラムが構成されている。その趣旨や選曲には、モシェレスのピアニストとしての思想が表れていると考えられる。

第4章では、本人の言葉や弟子による証言、演奏時の身体の動きに言及している批評、楽譜への書き込みなどをもとに、モシェレスのピアニズムと美学について検証した。その結果、モシェレスが演奏において心の機微を重視しており、彼が創作した数多くの練習曲が単に技巧的な要素の習得のみを目的としていたわけではないことが明らかになった。さらに、演奏時における姿勢、音階やオクターヴを奏する時の手の動き、楽譜に記された運指やペダル記号の意図、目指した音色とタッチといった、具体的な奏法に対するモシェレスの思想も浮き彫りになった。

モシェレスは、現代の演奏会において演奏される頻度の少ない作曲家である。しかし、以上の考察を踏まえると、リサイタルという形態や、特定のテーマを掲げた演奏会という発想、さらにこれまで演奏機会に恵まれなかつた過去のピアノ作品の復権の背景には、モシェレスのピアニストとしての挑戦があったとも考えられる。本研究において明らかになったモシェレスの演奏スタイルやピアニズムは、彼の作品を解釈する際の重要な鍵になるだろう。また、演奏会に対するモシェレスの思想や美学は、現代の演奏家への提言とも捉えられる。モシェレスは、ピアニストの役割、演奏会のあり方や演奏という行為の意義といった本質的な問いを我々に改めて突きつける存在と言えるだろう。